

平成 22 年 3 月 24 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18520375

研究課題名（和文）ウエストサクソン方言福音書 6 写本（古英語 5 写本と 13 世紀写本）の完全比較

研究課題名（英文）Manuscript Variants in West Saxon Gospels — MSS CCCC140, Bodley 441, Cotton Otho C. i (vol. I), CUL Ii.2.11, Royal I.A xiv and Hatton 38 in Comparison

研究代表者

小倉美知子 (OGURA MICHIKO)

千葉大学・大学院人文社会科学研究所・教授

研究者番号：20128622

研究成果の概要（和文）：

古英語期（700-1100 年）の文語標準語とされるウエストサクソン方言で翻訳された聖書の福音書が、写本の違いによって、綴りの相違はもとより語順・文法形態・文脈にも違いを見せながら 13 世紀まで書き継がれた様子を、個々の写本の転写により明らかにし、自由訳とされる福音書の中に古英語らしさと翻訳体とが混在するさまを実感できるような形で提供する準備が出来た。ほぼ同時代に同一方言で書かれた写本間の異同を見ることにより、語学的に重要な「差異」とは何かを知り、言語変化の原因を探る手がかりを見出すことが出来る資料となるはずである。

研究成果の概要（英文）：

West Saxon dialect, the literary standard in the Old English period, provides us with at least five manuscripts of the Gospels, which are followed by a thirteenth-century version on this tradition. Manuscript variants of the same dialect are expected to give evidence of diachronic changes lexically and morphologically. But even though they are written in the same period of time, they show scribal differences and/or distinctions in manuscript designs. Each verse of each chapter, when arranged side by side in my future edition, may present greater divergence than expected.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
総計	3,300,000	780,000	4,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語史

1. 研究開始当初の背景

Liuzza (1994; EETS, o.s. 304) が Skeat (1871-87; rpt. 1970) を超えられなかったことが出発点である。ウエストサクソン方言訳の福音書の刊本は Skeat が定本とされてきたが、これが絶版となったことにより、同様に一冊で複数の写本の異同が見開きの形で読めるような新しい版が要求された。しかし EETS 版のレイアウトに従わざるを得なかった Liuzza は、MS CCCC140 に基づくとしながら、実際は Bodley 441 と CUL li.2.11, さらに Bodley の流れを引き継ぐ Royal I.A xiv, Hatton 38 を意識し、Luke, John では Cotton Otho C.i (vol. I) も活用して、脚注の扱いに止まらず main text も写本通りではない構成にせざるを得なかった。しかも Notes & Glossary は 2000 年、EETS, o.s. 314 として 2 巻本の装丁となり、研究者が待っていたものからは、かなり離れた仕上がりとなった。

2. 研究の目的

(1) まず Liuzza (1994) のテキストがどれほど写本に忠実かを探るべく、Cambridge, Parker Library にて CCCC140 を調査した結果、形態的な「直し」のみならず、punctuation の違いによって文の要素の区切り方にも問題のある箇所が見られたため、そうした箇所を 2 巻目の注釈で確かめながら読むよりは、一冊で写本間の関係が一望できる edition を作りたいと考えるに至った。

(2) 従って最終目的としては、1 つの写本に基づいたテキストに脚注として写本異同を付すのではなく、古英語写本 5 写本と 13 世紀の 1 写本とを、見開きですべて見られて比較できる edition を作るべく、研究をスタートさせた。Skeat 版は *Lindisfarne, Rushworth*

という北部・中部方言の gloss を入れており、その分ウエストサクソン写本は CCCC140 と Hatton 38 だけに限り、あとは脚注の形になっている。つまり Skeat 版では方言間の異同を中心に見ることができたので、ウエストサクソンという文語標準語でもある 1 つの方言内での異同を見ることのできる edition を作りたいというのが狙いである。

3. 研究の方法

(1) まず 6 写本すべてを British Library (London), Bodleian Library (Oxford), Parker and University Library (Cambridge) において調査、事前に手元のマイクロフィルムとファクシミリによって転写したノートを持っていて詳細に引き比べた。写本に戻らないとどうしても分らない点、特に Cotton Otho C.i (vol. I) のように破損の激しいものに関しては、実際の写本でも文字の解読が不可能なところがあるため、渡英しての調査は不可欠であった。

(2) 解読に際し、paleography の専門家に会うべく国外の所属学会の大会に参加し、また大学訪問を行った。また国内においても聖書関連の古い文献探し、同じ分野の研究者との意見交換、コンピューターに作成した資料を打ち込むための技術を教わるべく諸大学を訪問した。

4. 研究成果

成果として強調したいのは、6 写本を比べることにより (1) どの写本が失われた原本に最も近いのか、(2) どの写本がどの系列に入るのか、(3) どこが違うのか、相違点のうちどれが重要か、(4) それにより最も特徴的と考えられる写本はどれか、等が確認でき、また発見もあったことである。成果の公表の仕方とし

では (5) 実際の刊本のレイアウトにまだ選択の余地がある。

(1) 原本に近いものとして CCCC140 か Bodley 441 かと言う議論は長い間さされていながら結論は出ていない。CCCC140の方が近いと思われる点多々あるが、決定的ではなく、むしろ両写本が同時に別れ出た可能性が高く、また Cotton Otho もほぼ同時期に書かれたという説についても反証は得られていない。転写の比較による限り、CCCC, Bodley, Cotton Otho の3者同時期説は否定できず、時期を考えるにはむしろ John の比較するのが妥当と思える。Cotton Otho には Matthew がないので、最も詳しい訳の部分と比較できないのが難点である。

(2) 1996-7年に MS Beinecke 578 (Yale) を調査した時も結論したように、Royal と Hatton が Bodley の系列に入ることは類似点の多さから明白で、Bodley 写本がウエストサクソン福音書の中では最も信頼されて書き継がれていったものと見て間違いない。Hatton 38 からの形態的変化は誰の眼にも明らかで、13世紀に残る古英語写本の伝統として位置づけられる。

(3) ①相違点のうち、最も目立つのは punctuation である。CCCC140 は大文字の前で punctus versus (;) を用いており、現代のピリオドとほぼ同じ使い方である。一方 Bodley 441 は大文字の前で ; の場合も . の場合もあり、コンマやコロンの当たるものも用いていて、統一に欠ける。この統一の無さを写本年代の早さと見るにはいささか無理があり、やはり個々の書き手の慣習と見るべきであろう。Royal からは punctus elevatus (·) が見られるため、CCCC, Bodley, Cotton Otho より遅い証拠になり得る。古英語期の写本があまり punctus (·) を用いないのはごく普通で、その位置が変わることも十分考え

られる。つまり現代のように関係代名詞の制限用法と非制限用法の区別を句読点に頼ることは出来ないので、句読点の有無で読みの違いを断定することが出来ないということが、写本の比較で分るのである。

②語尾変化の弱化・単純化は通時的変化を示すため、Hatton 38 に顕著である。ただし動詞の-on 語尾はすでに Royal で-en と弱化する傾向が見られ、wæron 'were' も Hatton と同一箇所では wæren となる場合がある。これは indicative/subjunctive の ambiguity の例となる。また特に CCCC 140 と CUL Ii.2.11 との間で-ende と-enne の交替が見られる。例としては

Lk 9.31 [quem completurus erat]

Cp: þe he to gefyllende wæs

A: þe he to gefyllenne wæs

'which he was to accomplish'

Lk 24.21 [quia ipse esset redempturus israhel]

Cp: þæt he to alysenne wære israhel

A: þæt he alysende wære ysrahel

'that he were to redeem Israel'

(Cp = CCCC140, A=CUL Ii.2.11) つまり[n] と [d] の調音位置の近似による assimilation が綴りに現われた結果とだけ見るか、ラテン語の直訳ではないものの、完了分詞や gerund に単一形を持たず迂言用法でしか表わし得ない古英語としては、be 動詞と組み合わせる形がまだ決まっていない、tense system の確立までにはまだ時間のかかる、その初期の段階を示す重要な例と見るかの問題である。

③古英語では格によって動詞との関係が示せるため、前置詞は必ずしも必要ではない。と同時に、前置詞が格を支配するので、目的語との呼応が要求される。原典のラテン語に前置詞が無い場合でも古英語で用いられるのは、英語の用法が書き手によって選ばれる

からである。例えば *Mt 5.22 [fratri suo] (Cp) hys breðer; (A) to his breðer* と *Lk 20.42[Domino meo] (Cp) to minum drihtne, (A) minum dryhtne* を比べると、英語用法が好まれるのが必ずしも同じ写本ではないことが分る。

④古英語では男性・中性・女性の3つの文法的性が人称代名詞と共に指示代名詞にもあるため、どちらの活用形も関係代名詞としての使用が可能である。*Mt 21.8 [in uia] (Cp) on þone weg* と *(A) on hys weg* のように、入れ替わってもさほど文脈に影響しない例もあるが、例えば次のように構文全体に関係する場合もある。

Lk 9.24 [nam qui perdidit animam suam propter me, saluam faciet illiam] Cp: witodlice se ðe his sawle for me forspilð he hi gehæld; A: Witodlice se ðe his sawle for me forspylð. se hig gehæld. ‘Truly he who would destroy his soul for the sake of me (he) will make it whole.’

(4) 写本間の異同の比較により最も特徴的な写本と分るのは CUL li.2.11 である。この写本は CCCC140 よりは約半世紀遅く地域も西南に片寄るため語彙選択の違いも見せる。次の例では、明らかな綴りのミスで文脈を変えることで補っている。

Lk 22.11[ubi Pascha cum discipulis meis manducem] Cp: þar ic mine eastron wyrce mid minon leorningnihtum; A: þar ic nyme eastron. and wyrce myd mynum leorningcnyhtum ‘where I keep (eat) my Easter with my disciples’

次も誤って2度書かれた要素により否定文が肯定文になってしまった例である。

Mt 17.16 [et non potuerunt curare eum] Cp: and hig ne mihton hyne gehælan; A: and hyne myhton hyne gehælan ‘and they could not cure him’

間違うのがいつも CUL の方ではないという例が次のものである。

Jn 4.35 [Nonne uos dicitis, quod ad huc quattuor menses sunt, et messis uenit?] Cp: Hyne secge ge þæt nu gyt synt feowur monðas ær man ripan mæge; A: hu ne secge ge. þæt nu git synd feower monþas ær man rypan mæge ‘Do ye not say that there are yet four months before one could reap?’

CUL の特徴のひとつに、写本時期が遅いゆえの動詞構文の変化がある。動詞の前綴りが違う例、例えば他の写本の *underfon* ‘receive’ に対する *onfon* が見つかるのと共に、動詞+副詞の構文で、語順（正確には要素の順序）が違う場合が見られる。これは副詞性を持った前綴りの後置による verb-adverb combination の発達を窺わせる例である。

Mt 27.60 [et aduoluit saxum magnum ad ostium monumenti] Cp: and he to awylte mycelne stan to hlide þære byrgene; A: and he wylede to mycelne stan to hilde þære byrgenne. ‘and he rolled a great stone to the opening of the sepulchre’

(5) このように、同一方言で書かれた写本の比較は、様々な言語的事実を明らかにするため、是非とも見開きで6写本を収める形の edition を作りたいが、現在の主流がパラレルテキスト式のレイアウトなので、刊行するためには妥協もやむを得ないかも知れない。パラレルテキスト式ならば出版してくれるところはあるが、それでは全体の分量から Matthew/Mark と Luke/John で2巻になってしまうので、やはり Liuzza と同じ不便さが起こる。とりあえずは資料として保存しておき、どのような形にしても早めに出版したいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 18 件)

- ① Michiko Ogura, “Differences in Significations: *DOE*, *TOE(HTE)*, *MED* and *OED*” (J. M. Toswell編集で2010年7月カナダから出版予定のオックスフォード辞書に関する論文集に掲載決定) 査読有
- ② Michiko Ogura, “Old English Verbs with the Genitive Object – A Doomed Group?”, in Yoshiyuki Nakao, Michiko Ogura and Osamu Imahayashi (eds.), *Aspects of the History of English Language and Literature* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2010), 53-69. (2010年6月出版予定; 図書に挙げたもの) 査読有
- ③ Michiko Ogura, “The Seven Deadly Sins as seen in the Lexical Change”, in Michiko Ogura (ed.), *Cultural Heritage of Germanic Tribes* (千葉大学大学院プロジェクト・リポートNo. 183) (2010), 13-48. 査読なし
- ④ Michiko Ogura, “The Interchangeability of the Endings *-ende* and *-enne* in Old and Early Middle English”, *English Studies* 90.6 (2009), 721-734. 査読有
- ⑤ Michiko Ogura, “Periphrastic Readings and their Element Order in Old English Version of the Gospels”, *Studia Anglistica Poananiensia* 44 (2008), 63-82. 査読有
- ⑥ Michiko Ogura, “*The Paris Psalter* and *The Metres of Boethius*: are they formulaic as Anglo-Saxon verses?”, *SELIM* 14 (2008), 7-36. 査読有
- ⑦ Michiko Ogura, “Negative Contraction and Noncontraction in Old English”, *Neophilologische Mitteilungen* 109.3 (2008), 313-329. 査読有
- ⑧ Michiko Ogura, “Variant Readings in the Two Manuscripts of the West Saxon Gospels: MSS CCCC 140 and CUL Ii.2.11”, in Amano – Ogura – Ohkado (2008), 109-120. (図書に挙げたもの) 査読有
- ⑨ Michiko Ogura, “Old English Verbs of Tasting with Accusative/Genitive/*Of* – Phrase”, *Neophilologus* 92.3 (2008), 517-522. 査読有
- ⑩ Michiko Ogura, “OE *Agan* to Reconsidered”, *Notes & Queries* 252.3 (2007), 216-218. 査読有
- ⑪ Michiko Ogura, “Verbs of Emotion in Old and Middle English”, *Poetica* 66 (2007), 53-72. 査読有
- ⑫ Michiko Ogura, “Camel or Elephant? – How to lexicalise objects foreign to the Anglo-Saxons?”, in Guido Oebel (ed.),

Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache (München: Lincom, 2007), 228-245. 査読有

- ⑬ Michiko Ogura, “*ME douten* and *dreden*”, in Graham Caie (ed.), *The Power of Words* (Amsterdam: Rodopi, 2007), 117-130. 査読有
 - ⑭ Michiko Ogura, “Prose *Boethius* and the *Metres of Boethius*”, in Michiko Ogura (ed.), *Language Contact examined from Viewpoints of Language Teaching, Comparative Linguistics and Historical Linguistics* (千葉大学大学院プロジェクト・リポートNo. 141) (2007), 27-66. 査読なし
 - ⑮ Michiko Ogura, “Old English *Metres of Boethius*: how to accept the *Consolation of Philosophy* in an alliterating form”, *English Language and Linguistics* (The English Linguistic Society of Korea) 22 (2006), 173-195. 査読有
 - ⑯ Michiko Ogura, “Old English Preverbal Elements with Adverbial Counterparts”, in Hans Sauer and Renate Bauer (eds.), *Beowulf and Beyond* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2006), 101-117. 査読有
 - ⑰ Michiko Ogura, “The Making of the *Metres of Boethius*”, in Eiji Yamada (ed.), *Bonds of Language* (Tokyo: Kaitakusha, 2006), 42-58. 査読有
 - ⑱ Michiko Ogura, “Element Order Varies: Samples from Old English Psalter Glosses”, in Michiko Ogura (2006), 105-126. (図書に挙げたもの) 査読有
- [学会発表] (計 10 件)
- ① Michiko Ogura, “*Hap*, *Happen* and *Happy*: a lengthy process of their borrowing”, 日本中世英語英文学会、28 November 2009, 慶應義塾大学 (日吉)
 - ② Michiko Ogura, “Old English Verbs with the Genitive Object – A Doomed Group?”, SHELL2009, 28 August 2009, 広島大学
 - ③ Michiko Ogura, “Differences in Signification: *DOE*, *MED* and *OED*”, 日本英文学会、30 May 2009, 東京大学 (駒場)
 - ④ Michiko Ogura, “The Interchangeability of the Endings *-ende* and *-enne* in Old and early Middle English”, ICEHL, 26 August 2008, München.
 - ⑤ Michiko Ogura, “Cambridge University Library Ii.2.11”, SHELL2007, 7 September 2007, 名古屋大学
 - ⑥ Michiko Ogura, “‘Have a Bite’ or ‘Eat it Up’? – Verbs of Tasting with a Genitive Object”, IAUPE, 9 August 2007, Lund
 - ⑦ Michiko Ogura, “Formulaic Expressions in *Paris Psalter* and the *Metres of*

Boethius”, IAUPE Medieval Symposium, 3 August 2007, Ystad

⑧ Michiko Ogura, “Verbs of Tasting + Accusative/Genitive/*Of*-Phrase”, 日本英文学会, 20 May 2007, 慶應義塾大学 (三田)

⑨ Michiko Ogura, “Old and Middle English Verbs of Emotion”, International Medieval Congress, 12 July 2006, Leeds

⑩ Michiko Ogura, Old English *Boethius*: how to accept the *Consolation of Philosophy* in an alliterating form”, The English Linguistic Society of Korea, 26 June 2006, Seoul

[図書] (計 3 件)

① Y. Nakao, M. Ogura and O. Imahayashi (eds.), *Aspects of the History of English Language and Literature* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2010) (6 月出版予定) (共編)

② M. Amano, M. Ogura and M. Ohkado (eds.), *Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2008). xi + 403 頁 (共編)

③ Michiko Ogura (ed.), *Textual and Contextual Studies in Medieval English: towards the Reunion of Linguistics and Philology* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2006). viii + 216 頁 (編集)

[その他]

書評論文:

① Yoshitaka Kozuka, *A Linguistic Study of the Authorship of the West Saxon Gospels*, 大阪大学出版, 2006, reviewed by Michiko Ogura, *English Linguistics* 25:1 (2008), 271-291.

書評:

① Linda Mugglestone (ed.), *The Oxford History of English*, Oxford University Press, 2006, reviewed by Michiko Ogura, 『英文学研究英文号』(2008), 130-135.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小倉美知子 (OGURA MICHIKO)
千葉大学・大学院人文社会科学研究科・
教授
研究者番号: 20128622

(2) 研究分担者

()
研究者番号:

(3) 連携研究者

()
研究者番号: